

①授業から学んだこと

私は実習 2 週目の月曜日から授業実践が始まった。指導教員の先生が早いうちから授業をたくさんこなして、経験を積んでもらえばいいとのことで、配慮してくださった。私が担当した教科は高等学校の日本史探求と 1 回だけ歴史総合を担当した。授業の形式（例えば、講義型・議論型・パワーポイントを使用する授業など）は自由にしてもらったので、純粋に自分の行いたい授業の形式を実践することができた。実習期間中、私は合計 15 回の授業をしたが、どの授業でも共通して見つかった課題が 2 点あり、「1,歴史の本質や意義を捉えて説明する」「2,生徒とのやり取りの手段が少なかった」ことである。1 については、これは教材研究によるものだと後になって考えた。歴史上、様々な出来事があったが、これらを教科書で取り上げているのには、これらを学ぶ歴史的意義や本質がある訳で、それをただぶつ切り説明するのではなく、どう関連しているのかを説明することで、生徒も「そういうことか」と納得してくれるのだと、授業後に先生から教えていただいた。2 については、もっと授業準備に時間が取れれば、歴史的事象について、生徒同士のディスカッションを取り入れることもできたと少し後悔している。これらの課題を実感したことから、教育実習が始まる前からの準備をより一層、入念に行うべきであったと学んだ。

②生徒との交流の中で学んだこと

授業の時に、「これは何か分かりますか？」のような質問をすると、こちらが考えていた答えを返してくれる生徒もいれば、分からずに違う答えを返す生徒や黙り込んでしまう生徒もいた。つまり、生徒によって理解度が違うことを把握することや、答えが分からず黙り込んでしまう生徒には助言をすることの重要性を学んだ。これを受けて、実習中に理解度が違う生徒がいる場合は、授業の最初で復習をする、その生徒に対して質問の回数を増やすなど、授業中でのアプローチを多く実践した。そうすると、次回以降の授業での理解度も上がっていたし、更には授業を聞く態度も良くなっていた。黙り込んでしまう生徒には、その答えを自力で導き出せるように、「これはこうだったよね」等と答えに関係することを助言していくと、実際に答えてくれることが多かった。生徒にとってはその単元を勉強するのは最初で最後なので、一回一回の授業を意味あるものにしなければならないという自覚を持つことができた。

③職員室の様子から学んだこと

私は毎日、朝の職員朝礼に参加させていただいた。そこでは校長先生と副校長先生がその日の予定や昨日の出来事をお話するのがいつもの流れのようだった。その時に、居合わせた教職員は全員、「おはようございます」と挨拶していた。これをもって、一日のスタートを切っていた。私も教員になって、その中に混ざりたいと思った。また、普段の職員室の雰囲気

気はとても良かった。一人一人の教員がお互いを認めており、尊重されているように感じた。近くの席同士の先生で和気あいあいと談笑していたのを覚えている。私も何回か元担任の先生とその周りにいる先生方と談笑した。そうしている時間が本当に楽しく、私の緊張をほぐそうとしてくれたため、先生方には大変感謝している。したがって、職員室は誰もがコミュニケーションをとれるような環境にしていかなければならないと学んだ。いついかなることに協力して対処することができるからだ。その反面、一人一人の仕事量も多いように感じた。休んだ生徒の保護者に電話をしたり、授業の準備をしたり、校務の話し合いをしたりなど、挙げればきりが無いが、これらは実習 3 週間を通して、毎日目の当たりにした光景である。教員の仕事の多さは、実習前でも感じていたが、実際に直接自分の目で見ると、これだけの仕事をさばいているのに尊敬の念を抱いた。そんな中でも私に優しく話しかけてくれたので、感謝の気持ちで一杯である。

④事前に立てた目標及び課題について

私は事前に「積極的に生徒とのコミュニケーションをとる」ことを目標にしたが、その達成度は 50% くらいだと考える。私が担当したクラスは 1-2 であり、朝礼・終礼・LHR（ロングホームルーム）・教室の掃除・学級日誌を主に手伝わせていただいたが、授業数の都合上、1 年生なので歴史総合の授業を担当する予定だったが、それができなくなってしまった。朝礼・終礼時の生徒の反応はとても良く、掃除の時も生徒自ら「ちりとりやります」「ごみ集めます」と話しかけてくれたため、コミュニケーションはそこそこ取れたのだが、授業ができず、中には「先生の授業、楽しみにしてたのに」と残念がっていた生徒もいた。授業変更や内容的に世界史探求に近いものが実習の時期に重なったため、仕方ない部分もあったが、私の実力不足もあると思う。ただ、学級日誌で生徒と文通することができており、反応も良かったので、これらを総合的に判断して、達成度は 50% くらいである。今後の課題としては、授業時における生徒とのコミュニケーションの取り方であろうか。

⑤教育実習全般にわたって

私の場合はとにかく「教材研究」に時間を使った。これは日本史探求に限った話ではないと思う。日本史探求のように、歴史を扱う教科に関しては、生徒に史実を正確に教える必要があるため、インターネットや教科書等で用語や出来事について調べるときは、脚色を加えられていない 1 次史料により近い史料から情報を得るようにする。生徒に嘘を教えてはならないからだ。やはり私の指導教員の先生もおっしゃっていたが、生徒は教師が授業で説明したことを、意外にもよく覚えているのである。したがって、授業で間違ったことを教えてしまうと、生徒が朝テストや定期テストで間違えて教えた語句を答えてしまうので、教師の立場をより一層、自覚する必要があると思った。私も実習期間中に何度か間違えて教えてしまったことがある。ただ、それはすぐ次の授業で間違っていたと修正していたので、被害は最小限に抑えた。もし間違えて教えてしまったものを、生徒が受験の時まで覚えてしまえば、これが原因で試験に落ちることもあるかもしれない。そう考えると、教師の一挙手一投足が生徒の人生に関わってくるのだと意識を改めなければならない。

教師にとってはたかが一人の生徒であるが、生徒一人一人にとっては一生に一度しかない高校生の期間である。実習生の立場であっても、生徒の人生を握っていることを忘れてはならない。これが、教育実習を通して、一番痛感したことである。

⑥その他

最後に、私からおすすめしておきたいことを紹介する。それは、「クリップボード」を用意しておくことである。私はこれを朝礼・授業の時・指導教員との打ち合わせ等と常備していた。朝礼で、生徒に伝えるべき内容があれば、それをすぐにメモを取ることができるようにするためや、授業の時にパッとプリントやカンペを確認することができるようにするためなど、常に肌身離さず持ち歩いていた。一番便利なポイントは、字を書く時に安定していることである。授業見学の時も常にメモを取っていたので、これがあって本当に助かった。実習前に自前で用意しておくといだろう。